



徳の心
伊勢

東洋文庫



塩坪菅笠序文
久能禰鶴編輯

俳諧
庵出花 四篇

明治二十五年

辰初暮

楓園齋版

庵のあそび 楓園の如く 舟楫を
あそびし 舟楫を 楫を 舟楫を
して 舟楫を 舟楫を 舟楫を
舟楫を 舟楫を 舟楫を 舟楫を
舟楫を 舟楫を 舟楫を 舟楫を
舟楫を 舟楫を 舟楫を 舟楫を
舟楫を 舟楫を 舟楫を 舟楫を
舟楫を 舟楫を 舟楫を 舟楫を
舟楫を 舟楫を 舟楫を 舟楫を

て又東林の福の里を居るころを待つ
たりのしるををらるる 於て千舌の
をいふて其をものらふくの人

ふりつとて

中々

はるかに



俳諧

庵の巻

来乃却

福を来れ向定をれを夜明けなり
たさるるにもの取 くらきけ神の
花の候は喜にあふれは始なる
押靴の音もあつりやこころ日
梅の影りぬけお物と志しれなり
一りわが心をあま玉に袴うれ
かのこころを魅きし福の学
一日の友らや福よおのこころ計

静所
柳坡
葉舟
松壺
逸我
茶室
素山
香石

芳方其尖ひ是也ひさきうれ
ぬうりぬく梅も白く上初めり
鴨の毛のたうれをまらや芥の中

鶯鶯をよま
そのうれさけあまう世ふ

子代のをれこもるゆれや年の果
くほさけ夜のまらや初めり
敷の子や菊武免きこるまのまら
梅も若を初れみこる上初めり
其の聲をきつる耳にまら
稚子よこりまけあまう世ふ

果糖
藍庭
永接

松軒
地扇
福留
今
今
今

こもあつて宵を初るるまらうれ
海草よほくし脚や夕うまらみ
号や敷きまらあま玉のこも
出たてまら扇か梅はゆまら
山甲を隔くもく見此中
もまらして居るあまら梅のま
まらりや脚まつくね金泥ま
敷の子に老の歯目撥をまら
世まらあまらまらまらまら
嵐まらの歯まらまらまら
そまらまらまらまらまら

梅岳
梅尺
竹類
梅水
不返
和雪
瓢水
梅圃
旭齋
十做
襦袴

藤樹集

まゝ人の歸るあはれなきは雪のま
世のすゝも人せし後也後ゆも
指まけてもとほりてさるる
一日はるる後野山はや通ふ
茶もすりたるけり家や梅の

社殿新造

まをといゆる梅もはるる日哉
月への影や雪もま代の梅も
一月や雪も麻もなれ水の
雀らけまて口をえん解るる
二つもまてうらむすとも

ウコ 蘭る

ウゴ 木根

ウゴ 吟丸

ウゴ 木苗

ウゴ 中宿

イヨ 衣州

イヨ 半直

イヨ 空

イヨ 竹臺

イヨ 暖節

イヨ 水

イヨ 芳律

イヨ 有

イヨ 春山

イヨ 半眠

イヨ 秋津

イヨ 耕る

イヨ 旭富

イヨ 春物

イヨ 可興

継音社々長の巻

首あつらひの巻
鞠紙の巻
雪の戸も賑ひ
茶の葉や雪の
降る中
まら雪の考
久々能
筆を
まらる

三

つゞきれはも 屯の暮りくう
んまうーにかさー 屯部
地志乃 屯部 抑う部
乃の國譲りて 屯部
余程も 伸と 或まや 門や
関を以とも 宛る 陽や 屯部
林部 や 足よ のたる 屯部

^{イセ} 龍水
^岩 地壺
^{イセ} 屯部
^{イセ} 屯部
^{イセ} 屯部
^{イセ} 屯部
^{イセ} 屯部

蘇の林部も 屯部の度になさう

まう 屯部の減らされぬ

耕雨
襍

青海部も 屯部の度になさう

浪うちつける 屯部の度

一 屯部 宛る 屯部の度

開とさうして 宛る 屯部の度

肩の凝部 宛る 屯部の度

三ヶ路 宛る 屯部の度

ひとと宛る 宛る 屯部の度

位も 宛る 屯部の度

牛の部 宛る 屯部の度

宛る 宛る 屯部の度

宛る 宛る 屯部の度

る 物 宛る 物 宛る 物 宛る 物 宛る 物 宛る 物

あつろ成りてくやうな川に
西東世におたやうと出れり
半少の御場其下於一十
破く状少の状をの御平けり
と名もろきくと多のさえ
石山の麓よりは玉の御
連の多の御をよし
只敷を利ぬる帯も御の
活也ーと御命をうむ
空相を問く小鏡を料らさ
と御命の速少御者

物 物 物 物 物 物 物 物

おふらたをけの屋も御
禰とる御の御も御
赤坂と御の御は御
壁の御と御は御
月代を壁御も御
僕とる御と御の御
低の御は御も御
先きの御は御も御
徳あやの御も御
御穂をけし御
御を御も御

物 物 物 物 物 物 物 物

新編

松の山もさうさうの春

百

お負も清しきりの境加減

福野

喜も殊更しく脱ひ日

少画

梅枝まけは芳ら次巻みさす

画

五三ののけしは使走らま

画

晴うけく月も俄りよみ様子

画

今留くのの脱ぬけの心

画

喰ふもの喰へぬ苗を撰ひて

画

定家のけまの伝舟も来り苦

画

新乾保のよもさすけ傍歌

画

笑ふもさうさうの短歌

画

まふ人暮を勝あらしも定家

画

晴の浮葉もよどき掛出

画

暑いも知らぬ土用此月厚く

画

匠ひまもさす冬のはりも

画

板のるれ是あつとめる奇舞すま

画

けさの字引とまふれとあ

画

咲電に屋簷の付とるあ

画

仰くは願ふ度柳引

画

思ふそけ退屈もさすあ

画

鳥と

六

新編

顔ひの瘡も瘡児 ひ
牙を候ふらて候より 今も余
ぬきまかり たる下駄を捨可
白骨此のぬきまかりと空の志なり
恠気の内角も折まらぬを
更な凝て廊下通らぬ志まことの申
こころのぬきまかりおとす家
野と植へぬきまかりぬきまかり
八つ折らぬきまかり心 空
建 急ぐぎぎと折らぬきまかり
誰か是れと死 斎の阿志り

相 垂 相 垂 相 垂 相 垂 相 垂 相 垂

こやくと踊るまをををよひ
赤と歌して面笑の下吹く
汐車りうらひは風子ぬきまかり
川岸に並んぬきまかり百組
此花の曇陰に樂事跡 儲け
夏を隣り しのび変り
赤ら顔さよふそけぬきまかり
ぬきまかりとぬきまかり
結ぶ子のぬきまかり

相 垂 相 垂 相 垂 相 垂 相 垂 相 垂

新編

七

故

草

花

木

片側里に家もあひく
あま月をたらしぬ娘のそよも影く
像斜燈にぬこむらさき
あまよりハ幡の音北無道作小
船のゆふれのなま流らぬ
世法ぬまを引すと此由帰りの光
あまおひりて使はれ新田
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま

新 城 新 城 新 城 新 城 新 城 新 城 新 城

飛出さく大は是結の跡をきく
二十載ても余何とさあま
あまの樹の中あまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま

新 城 新 城 新 城 新 城

結取や津あまのあまのあま
下結のあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま

新 城 新 城 新 城 新 城 新 城 新 城

蘇州府志

煙臺を神るあり
庫の言もなるにと拾ふ此情を
弘法も此世を志する
流り眼のつみりまを有かき
も引縁も神意と物ゆふ
領據も名のそま氏もいしれ
古の神たふさくと世をさる
ちつ因る今も及そ女形の舟
政の侍も浮世ふか
大はくうも半をまそ湖の屋を
志すは日徳をまそ忘れたり

危 物 危 物 危 物 危 物 危 物 危 物

嘆かしの心もこの世に
塔も儼りまきまそてハ舞
春の風もひかりを吹とま
五つやまののたまもて
昔の空の星も欠て照用急
今も空の中へ長海ソの
みまもあつたたり足指り
米搦ちやち待矢一方
念息してよと春込内御る
歴王身もそそりた
危付も係りし心 大

危 物 危 物 危 物 危 物 危 物 危 物

龍州

土用も本ぬり朝顔、
霞しきいのいつても答をさ
若の寺若れ活て花さ
解斬を放して髪も後の為
ふらう揚をよまの道寺
方角をけし西をに取集く
日如ふ成て先を何り
心もふらうりて有れも
二層もやうる。及れふ 矣

朝 庭 朝 庭 朝 庭 朝 庭 朝

夏北 部

波けとぬもかたぬと何り
虎の推とリ、強るも
そりぬ手せさるる縁りて部
若の表に新茶をみりて
葉外のみきて出て来る新茶
層も名も夏羽折りも
穂教もたうりぬ給や
中折もたうりぬ咄や
植の田の果やうりて

二可 蓮字
西系 松江
廿二 稲野
廿二 葉、
廿二 水
尾川 全 稲野
南

鳥

新編
新編
新編

くひゆふまし科記論をききまじりて
 うーあーの風のちてきまじりて
 天と地におもむきまじりて

半
 十湖

月と水と雲のひかりなり
 雲とせむとわつ木とついでに
 雲と物とや移るればはひり
 よし和とて揚るるはひり
 雲とくくの起るるはひり
 夏川やぬれきよとるはひり
 まつとりの命とてはひり
 まつとりの命とてはひり

菅
 菅
 菅
 菅
 菅
 菅
 菅
 菅

針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて
 針の日の霞にまじりて

尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾
 尾

尾

十一

神代卷の...

くさくさのうけぬしはまのつら
旅の途へては 船の時
久しかりは 春のまじり 若くて
皮はきり 杖は折れ 杖は折れ
風とて 鳴き 鳴き 鳴き 鳴き
草のつら 草のつら 草のつら
くさくさのうけぬしは 石の海へ
是こそ 志のたは 國の名は 志の

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

咲くも 咲くも 咲くも 咲くも
咲て 咲て 咲て 咲て 咲て 咲て
うらやまのつら 咲て 咲て
うらやまのつら 咲て 咲て
師のつら 咲て 咲て
推のつら 咲て 咲て
くさくさのうけぬしは 咲て 咲て
花のつら 咲て 咲て
今こそ 咲て 咲て
三階のつら 咲て 咲て

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

神代卷の...

新編
水鏡

桐子のやうに... 春のあけぼの
神引をりてきんをを
又... 佛きびの乳をらむ
跡をおもひのせく...
是... 荷馬に水うりけり
か... 折ふ... 何れあも蓮
石... 鏡さても... 門...
日... 娘の帰告き... 大...
月... 不... の... あり
秋... 園... 池... あり
彼... 岸... あり... あり

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

... 晴... あり... あり
... 行程... あり... あり
... 出船... あり... あり
... 舟... あり... あり
... 春... あり... あり
... 舟... あり... あり
... 舟... あり... あり
... 舟... あり... あり
... 舟... あり... あり

故人 富水
禰鶴 水
水 水 水 水 水

水鏡
十三

花柳

春の日の白ひをさす月
月とつもの方切向なり
給ふる積寒も春よあけの月
ふはれりぬての酸み
春のものと薫る梅の匠の船
さやまの舟に隠れりて
吉人集りての月も清き
隠れりての月も清き
月並みの春の市に梅枝
年忘れしとて又遊ぶ
春もぬれぬとけのよきとみ

水 留 水 留 水 留 水 留 水 留 水 留 水 留

温あつた水に花をさす
春の日の白ひをさす月
給ふる積寒も春よあけの月
ふはれりぬての酸み
春のものと薫る梅の匠の船
さやまの舟に隠れりて
吉人集りての月も清き
隠れりての月も清き
月並みの春の市に梅枝
年忘れしとて又遊ぶ
春もぬれぬとけのよきとみ

水 留 水 留 水 留 水 留 水 留 水 留 水 留

花柳

新編

通る人よあはれ福井多うらん

言ひ伝はしよと政福年

嬉捨てんよも愛ても母一母

柿のちもあつた宮に替るを

あまもこれかたなり冷の澄り也

用を遣てよ何とのをも尻

親まうも形りぬらあふの口借之

たまは形つころ山寺のあふれ

屋敷とおくの愛家花利後

アそよりも徳き果の親く

銘

文禮

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

六月廿波を梳りよの泊

竹る信を片おの夕憚

冬難難株をまんと節上を

芝草の草火のまゝ所なる

弓張のくけりあはれ膝の下

ふふさうやとてあはれあ

あふ身御あふまぬよまこし

甲午の男あはまもちたり

新田も恋ゆへ僕の流れよりの

跡跡何の流ききあ

禰鶴

琴春

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

号

新編
おの
おの

冬に籠居るものをもいふらん
塩辛ものへ酒をさし飲ん
思育のこぼれやうたまる房の夢
草の巻居の吟りききたら
青咲きこころは良もむせぬん
腰拭を解し大笑ひして
只ひと本ぢり花てそく名を海り
念佛時の子存の証
たまもや借ぐいあれと落る白織
むかむかちりて困るのひおく
船の早の何よりうめぬの馳走あり

智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春

西園ても誇よりも先地多
おややおてあつた店張る
よぬかをりさせる細流の井床几
は殿さより妹妹のまをさ
とみ角は徳珠の今に流り帯
死にようこふ内とけ華礼
こころにめそをたものち名の扱て
春ささりてと草をさし以著
おととも勝子ささうくお子お撲
知らぬものすくう船ついで存る

智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春 智 春

山崎 如月

高きところを流るる水はせぬ燈籠は
又とて木石の交りや虫の空
鳴り響くもこの夕餉をよみしり
川裁まらぬや紅葉あはるるに
茅に石の影を映し秋死たアハ
ハ朝や暮るるをよみし水
くくもり雨降の裾や秋のそよ
組下は竹や石の末るる日如
秋涼——流のよきまの秋の浦
ああり——にあちと向るる水
ぬきしつる露の粒や空の朝

福物
今
石芝
茅畔
梅窓
社楽
杉吹
梅窓
咲翠
雪柳
連珠

冬やとして作りしは雪をみるるに
夕やけは海まで赤ん顔暑くな
秋のや海をくまるとも夕陽り
夕陽より色白なるをよみし
別と此れありや秋を候このま
麻痺や火縄の色をよみし山
是のよみ山も又よみし
石白く何處も青く秋乃と色
勝るるを新しき一角力取
くこのはよきも無く一歩の舞
月のる時一歩くく白ひく

丹波 芦山
イヨ 杏虫
体赤 霜影
体中 藤那
ハリマ 菁岳
カビ 更隣
フシゴ 兼跡
キイ 芥丈
色江 乍昔
洗玉

山崎 如月

花子の心は移りたやうな月
 きらびくは秋毎に秋をゆめたり
 けの森うねくも息ふ花火うね
 赤いよも春のめりりー秋のゆめ
 精進いそがし来こそ鷹の霜
 あり虫の鳴り秋の空の色
 小原女やいそくばあよあはれ
 簾よあむ木程候なり秋の夜
 まこと雲に降きく山や夕やう
 はたのる芒花月や暮りさし

三ノ 磯倉
 之舟
 仙台 南山
 一ツモ 曲川
 大坂 多腸
 三ノ 我意
 大坂 徳信
 五尾 市丸
 尾 嫦娥
 羽海

白萩や泣く花散ると春の雲
 月の團子を洗ひせる平
 厚皮の春を舞よ空のゆめ
 辞義してははれは有る
 脱ぐ肌急かそり夜汗のりた
 妹を隣にほろひ思たり
 半空を景気のるは中あはれ
 舟利を川よ船も換着
 唯家の隣海神のと入るこゝろ
 人よはまはれは妹の目入を

素衣
 徳信
 水 水 水 水 水 水 水
 水 水 水 水 水 水 水

鳥とて

二層の...

毛の艶れよのを自擧の結ひ髪
少春の朝ま際のためさむき
草と形なきのやうなり家の存
京ありまゝの約束のうつく
菅神のあまを無言を艶に
自由を免る免ぬあまの
花の枝持をて西は花の供
静りまゝも艶の風
流石をなまされ衣の大徳寺
子の利休のりふい龍多古日
降さるの雲と何お入り吹雪を

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

一よりありのまのいり哉
袖ひ縁の岫一草果報
雲層一に結細の帯
初う向て居るは静かたを風
佛の産湯ぬふ竹一筒
百程も石櫃を多表板
穢さく阿れを籠とをえん
孫とや伏せよの存変
最うお揚子取りお摺梅
風をぬく板の突様のまをくと
かたらの先んか孫と紀の関

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

思ふ...

二十

三才の巻

舟の中も改陸中一うらな出
て
舟を舟といふは是れは船
極多しと禁は結白早の葉
風好き 非難を以ての果

水船 水船

所は後の出来事とさきと
この世のなまらたもさきと
船も中々是うも楽よりるらん
履ひ男の根気はあがり
大巻の光りききと立年一は

右芝 船船 芝船

あつたけー 子候の梅
うらた 記書買きたたのきと
後流の心まのー 履き
飲む口持へ 海をうらむ
西京九十年一 哉 夢まくら
秋を隣に虫とよの
舟代もあつた月のきく
思ふはこれ流りのあつた
同くこれ 縁起のきく石佛
是れ 神にたてを

芝船 芝船 芝船 芝船 芝船 芝船 芝船

三才の巻

花を屋に夏の花をまたとて

花を屋に夏の花をまたとて
加さうと眠く燈のさきつり
まるも夜あがり船れと宿屋へ
晦日さうもちハ少月かき
佳夜りゆめりのちよきあけて
此れとのち海脈ハ元も
干汐中船の初合れよハ 湊
船の神よおてまきり
金物ハ印ハ垢かぬけて
半船機をいれるふと
時をゆくとまきと暮るハみん

船 芝 船 芝 船 芝 船 芝 船

船ちり月や少者の中心
とこのちの板の突極のまき
船ふとまきと毛つと
おとさうと毎月のまき
まきと船のよハ少月
換程も念の入るまき
あつとらまきハ一提
まきと船のよハ少月
度き提へのまき

芝 船 芝 船 芝 船 芝 船 芝

花を屋に夏の花をまたとて

巻の初

若くはこれとてはさきにはりや即の我ま

きききやや略の明有

我ひとて何れと後の子は是を

よき者えし湯のぬるくとも

後々常の道は形も増えあは

町の事さてもそとに老え

たそええひつりたる馬の飛

たまきねを舞うの生れつ事あり

高といひあきま何なるは始末

たさけの程の種もさきさす

あともともゆる湖木の鼻をて

本

標

沼 沼 沼 沼 沼 沼 沼 沼 沼

海士う斬蹄子段のたむろはる

暑きるれ聲に相さけ笑佛

笑ひよか戸の何ははけても

愛ははたてつをさきも知ははは餅持所

たまききき人のちきききて死

隔もたれらま形れては月花

たを登るるにあらきつ所終

飲たり息ふおるるにあらぬ

知るるのせぬさつうは三人

ひよろくしは隣の橋を来て親き

上顔持もともかせし西寺

沼 沼 沼 沼 沼 沼 沼 沼 沼

沼 沼 沼

廿三

清心

清心その身をぬくあの手忘れ
春も秋もけしきあつて
横つけの舟の自他をくらや
妾もせよまれのあいさ
向つてこそと見えし 園の草
おのゝあたひて魚のこ
昔は秋とて月の色なり
おぼろの燈は引きし
愛ふくも言ふの物さ
清心はる一草の塩
清心はる一草の塩

清心 清心 清心 清心 清心 清心 清心 清心

さー 春さく 掃
茶の誠も母のよき

清心

清心

廿四

水仙や花さきまは 多しの原こ
きちりくしんせてそはく少きりい
引船の福喜言や かしこくは
水仙やひはれは言信中際
我も割て穉葉あふや 甲力未
同を流もたれは流路を時千より
きぬ蒲園岸くは似は言 新
我うけあひのえたー 糸の月
枯るよりあるの香もろ尾末は
あけたのち梅もなき丘の河るは
下弦の遠きとるりや三十三

青豆 尾ハ
柳 尾ハ
福物
今
今
今
芥丈 キ
首鹿 尾ハ
木南 キ
晴雲
閑遊 尾ハ

むるも結くははは 掛菜ハ
花も多もえ氷や 化粧
まらちやちる系より 波うあ
岩のくもけきもく 築工もり
山吐やのやうー 尾ハ
平船入のひと 白梅や 寺の解
似合まぬと笑もまう後く既中ハ
古池のあまう 喜けしむの那
海へまらるる 橋もき可るう風

乙 瓢 上毛
碧彦 日向
砥丹 周
空井 京
福鈴 尾ハ
新村 尾ハ
新遊
市樂
定景

波志あきかありてハ飛ぶるる牙

行側舟の詠なる 水

自分もいづれとて沈黙も信じて

いづれも知らぬふは信じて

かゝる其澄澄とるのも光るく

吹て行くも眼き秋のうら

をのくくくくくくくくくくく

歌とてなれぬとてさるる

みーまきくくくくくくくく

連 福

水 水 水 水 水 水 水 水

歌 けく事もとくくくく

剛志のちれきくくくく

風意と事ものほくくく

耳流かやうよ一歌くく

心も社乃地もくく

いづれもくくくくくく

代々かきれとやうり

花のちとまきくくく

を甲あつとまきくく

花もよまきくくく

たもあつとまきくく

水 水 水 水 水 水 水 水

好まむ君を捨てて情の通ふ入
 ことくちを解くもなほめ後
 造作あるも未だぬわう智恵教
 口殿下りの誓三行して
 垣をらんと垣に粉雪に隨う色
 雪とくまういしとさうり情
 生向うは當りの能う細くは
 うのしと款の價千金
 ひも何れも惜ましくも有る事
 藤よまきむ虫も何とる事
 編束も移るも愛慕も又ねとる

水 智 水 智 水 智 水 智 水 智 水 智

情りのまのよの肉はとる
 丹桂の柏建くくくく見きり
 七色しんと日水服よふ
 さるはのうら花をりよ六情
 行よついで情の引 行

水 智 水 智 水 智

庵の花

庵の花三編 得てよ本をよむるに

一丁の表 得、高も 得水の得
十丁の表 花中福野の得得 得るよりなる上 得る福野の得

庵の花四編よ本粗集巻中よ付
以又院作を尚五編引張き成羅中
早行新巻の得 奉行の得

楓園執筆

○ 楓園編纂出版書目

諧俳	諧俳	諧俳	諧俳	諧俳	諧俳
庵の花	庵の花	庵の花	庵の花	幾千代集	鶴齡集
初編	二編	三編	四編	全	全
諧俳	諧俳	諧俳	諧俳	諧俳	諧俳
庵の花	庵の花	庵の花	庵の花	幾千代集	鶴齡集
初編	二編	三編	四編	全	全
諧俳	諧俳	諧俳	諧俳	諧俳	諧俳
庵の花	庵の花	庵の花	庵の花	幾千代集	鶴齡集
初編	二編	三編	四編	全	全

明治二十五年九月出版

非賣品 凌知縣平民 非育社々長

編輯人 久野禰鶴

知多郡架屋村三十一番戸 凌知縣平民

出版人 中嶋大助

名古屋市本町三丁目九十一番戸

